博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）三尾 裕子

学位申請者　エレナ・グレゴリア・チャイ・チン・フェン
（Elena Gregoria Chai Chin Fern）

論　文　名　Brides are still brides as they were?: Marriage Rituals and Women in a Hakka Community in Sarawak, Malaysia （「花嫁は依然として昔と同じ花嫁なのか？：マレーシア・サラワク州の客家共同体における結婚儀礼と女性」）

【審査の結果】

2010年5月27日、三尾裕子（主査）、西井凉子、宮崎恒二、内堀基光（放送大学）、石川登（京都大学）から成る審査委員会により、標記論文の審査ならびに最終試験を実施し、当該論文を合格と判断するとともに、最終試験を合格とした。

当該論文は、学位申請者の出身地であるマレーシア・サラワク州（ボルネオ島西部）の州都クチン市から50kmほどに位置する客家系華人居留地の女性の生活を、その結婚観の変化と婚姻儀礼の持続性との対比に焦点を当てつつ、アンケート調査およびインタビューを含む参与観察にもとづいて記述、分析した研究である。学位申請者はサラワク・マレーシア大学の講師としてクチン市に在住しつつ、複数回にわたる短期の滞在調査を含めて長期間上記居住地を調査し、東マレーシア（ボルネオ）の華人女性の現在を、その人生の最も枢要な転換点を軸に描くという、民族誌的に説得力ある記述を完成させている。

審査委員会は、本論文を、現地の社会環境についての十分な概観、調査の客観性、記述の正確さ、課題の的確性と推論の妥当性を備えた研究であると評価し、課程博士の水準を満たすものと判断し、全員一致で、申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのが相応しいとの結論を得たものである。

【論文の概要】

本論文は序文および結論の他、全7章から構成された英語による論文であり、299頁から成る本文の語数は図表等を除いて約82000語である。

長めの序文では、研究の動機について述べると同時に、ネイティヴ・アンスロポロジーの問題点に触れている。再定住している共同体の中の女性にとって、人生の最も重要な局面、つまり結婚について、その変化の様相と変化への寄与要因を探ることが

本論文の主題であることを明らかにし、都市出身のサラワク客家の女性としてこの研究に関しての学位申請者自身の立場について導入的に述べている。後者はことさら理論的には展開されてはいないが、調査対象の共同体に対して、インサイダーでもありアウトサイダーでもあるという両義性を意識し、それを研究の推進動機としたことを自省的に述べ、またそのような位置をもった調査者が直面した問題を明らかにしている。

第１章「研究の焦点」は、序文を受けたかたちで研究の射程と方法について、研究史を含めて具体的に陳述する。これまでサラワクの客家共同体に関する研究は極めて少ない上、既存の文献は歴史的な成立状況と初期の居住を扱ったものにかぎられていることから、申請者は特定的に客家女性に焦点を合わせた現代状況に関わる研究に向かった。一次資料はタパーにおけるフィールドワークであるが、その際、質問のタイプを標準化し、後の一括分析が可能になるようにした。それに加えて、共同体において行われた行事（特に、結婚儀式、清明節、タイ・パック・クン祭りなど）に参加して、それらの執行の具体過程を内部から観察したことが述べられる。調査においては、女性のインフォーマントへのインタビュー、とりわけ結婚に関する質問が、しばしば男性が前面に出てくることによって阻害されたことを告白している。

第２章「客家の女性とサラワクの状況」 では、研究対象となった客家共同体の構成と歴史的位置づけるために、半島部マレーシアをはじめとする他の客家共同体の研究を概観し、客家に共通する社会関係上の特質、とりわけ女性の地位について論じ、客家の勤勉性や、男女間の労働隔離の少なさを指摘している。ボルネオの客家は金採掘が回復してきていた 1800 年代に大挙して移住してきた人々であり、後には居留地を定めて営農民としてサラワク南部に広がったが、この過程を通じて、如上の客家の特質を維持しているとする。

第３章「タパー村」は、マレー語でタパーと呼ばれる調査対象の共同体（村）の経済状態について、フィールドワークからの経験的なデータによって論じている。この客家共同体は、1960 年代前半に対共産ゲリラ対策として強制的に集住させられた客家系華人から成る居留地であるが、こうした過去の制約に抗してサラワク特産の燕の巣の加工業を中心に経済的に繁栄してきたことを跡づける。

第４章「女性と結婚」では、過去と現在における結婚の家族制度に対する客家女性の認識を取り上げている。中国系社会は、一般に諸段階から成る婚姻の儀礼を遵守することと、これに先立つ婚資に関わる交渉を強調する。これは、花嫁側、花婿側双方の家族に重大な影響を与えるものとされており、現代的文脈に置かれ、女性に対する拘束の強い過去の家族形態に批判的なタパーの女性の場合も、みずからの社会的評価の現われとして、婚資の額に固執することが指摘されている。

第５章「結婚とサット」は具体的な婚姻儀礼を記述、分析している。ここでの儀礼

過程の分析は基本的にV・ターナー等の儀礼過程論に拠っているが、本論著者はそのなかでも「移行期」と呼ばれる局面、この場合には「（花嫁側の家族、花婿側の家族のどちらにも）属していない状態」に置かれた花嫁が「サット sat」と呼ばれる強い力、とりわけ「汚れた害力」を持っているという信仰と、それにもとづくさまざまに禁忌の存在を強調している。この局面にある花嫁は非常な疑いをもって扱われ、花婿の家族によってどこでもいつでも可能な限り避けられる。サットに関する記述と分析は、本論文のなかでも良く活写され、整合的に分析された部分である。

第6章「結婚後の生活」は女性の結婚後の生活について、ケーススタディを提示しつつ論じている。若い世代は、過去の世代よりも、結婚後の人生により多くの選択肢をもっており、たとえば儀式上は花婿の家族に婚入するかたちをとっても、タパーに住まずに、あえて夫と共にほかの場所で働くことにした既婚女性たちもいる。結婚前に既に他の国か都市で働いていた経験のある女性にこのような選択をする傾向がある。既婚女性と出生家族の間にも、現在では過去に比べて、より多くの接触が保たれている。

第7章「半男半女のマッチメーカー」では、結婚仲介者としての仲人の役割が極めて重要なものとなっているタパーにおける、半男半女と目された男性について、その人格と役割について描写する。仲介者は通常は女性であるが、この人物は霊媒者としての人格と働きの延長上に結婚仲介者となったものであり、彼の存在によってタパーにおける婚姻の特徴、すなわち霊的・儀礼的意味が顕在化する言うことができる。

結論章においては、本文全体を要約するとともに、変化する社会状況下で女性の地位が大きな変容を遂げているにもかかわらず、タパーにおける婚姻儀礼が基本的に旧来の形態を保持していることについて、これが客家の文化的アイデンティティを維持する契機となっていることとの関連を指摘している。

【論文の評価と審査の概要】

本論文の特長は、結婚を通して変化する女性の社会的地位のあり方、および持続する儀礼の過程分析という二重の視点から、サラワクの客家系華人の特定の居住地社会の現在を詳細に記録した民族誌として大きな意義をもつことにある。著者（学位申請者）は本論文の全体を中国外に居住する華人研究あるいは華人ディアスポラ研究の一部として位置づけるよりも、居住地社会の内部の人間関係に主眼を向けている。その意味では、グローバルな華人の拡散の枠組のなかでの客家研究というよりも、サラワク研究という特定地域の研究の枠組みで重要な貢献とみなされるであろう。また女性に焦点を当てた研究ではあるが、現代文化・社会批判的な意味でのジェンダー論からも離れたところにあり、ここでも民族誌的な視点と方法が貫徹している。こうした枠内において、研究目的に適合した参与観察と数量的に適切なデータの収集がなされて

おり、後続する調査研究者にとっても有益な資料を与えるものと判断できる。とりわけ、変化する社会状況のなかで、自らも変わりつつある女性がいかに婚資を含む保守的な儀礼面に固執するかを記述、分析した点は、十分な評価に値する。

中国外に在住する客家系住民に関しては、世界大にわたる研究があり、諸所における客家アイデンティティについても研究の蓄積には大きなものがある。客家研究の中軸に関わるとも言えるこの問題について、本論文が寄与するところは大きくはない。何よりも本論著者の思考過程において、比較的安易に客家の集団的特性についてのステレオタイプに依拠しがちなところが見られるのが、そのように判断する理由である。おそらくそれは、著者が華人としての教育よりも、マレーシア国民としての教育環境のなかで育ってきたことに由来するところの、漢族文化研究の基礎的素養の不足に求められよう。しかし、本論の特長を形成しているのもまたこの点であり、調査対象となった居住地の女性たちが有する客家意識の根拠を、素朴ながらもその根本から問いかけ、問いなおしてゆく姿勢には一貫したものがある。ここからも一村落に関わる同時代民族誌であるという本論文の性格にも至るのである。審査の席上においても、客家研究に関する如上の指摘がなされたが、学位申請者はこの不足の側面まで含めて、自己の研究の現段階での達成と未達の部分を識別的に認識しており、サラワクおよび近隣諸地域の客家社会の女性に関する比較研究を今後持続的に研究していく具体化した用意のあることを、審査員に良く知らしめた。

同時代民族誌としての成果については、審査員全員がその適正さを評価したところであり、今後独立の研究者としてフィールドワークをともなう地域研究を切りひらいてゆく能力も疑い得ないところであるが、本論文をより十全たるものにするには、なお埋めるべき諸点が見られる。一つは、本論にも触れられている、大都市とりわけシンガポールに働きに出て、その地で結婚している女性たちについて分析を進めていない点である。もう一つは、これも本論で触れられているところではあるが、当該居留地で加工業労働者として働き、また華人男性と結婚しているサラワク在来の民であるビダユ人女性と華人女性との日常生活における関係について考察を深めていない点である。審査会におけるこれらの指摘に対して、学位申請者はこの不足点をよく理解しており、今後本論の諸形態での発表に当たっては、これらの諸点を補って完成させる必要があることを認識している旨、応答した。

調査対象地は、元来政治的理由により集住化された集落であることから、社会調査にはある種の困難が内在していたと考えられるが、学位申請者はこの点もよく克服し、的確な記述と妥当な推論から成る学位申請論文を完成した。如上の諸点と審査会でのそれらに対する申請者の応答も含めて、５名の審査委員は一致して、課程博士の論文として合格と判断した。